

— 受講生のレポートから —

博物館実習展における展示テーマとメッセージ性について

文20-299 佐伯 実果子

はじめに

本レポートでは、博物館実習展での展示について、特に展示テーマとメッセージ性の観点から考察した後、博物館実習での成果と今後の課題について述べる。

1. 特定の層を対象としたテーマ設定について

本章では、特定の層を対象とした展示テーマ設定について論じる。

博物館実習展では、主に20代の女性を対象者として想定し、対象者に興味を持って貰えるようなテーマを設定した。実習展が大学内の博物館で行われることから来館者が大学生中心になることが予想され、かつ展示をつくる私たち自身に近い層を対象とすることで、より伝わりやすい展示になると考えたからだ。しかし、この設定には大きく2つの問題点があった。

1つ目は、対象以外の層の人々に疎外感を与えたことだ。実習展開催期間中、特に高齢男性の来館者から、「自分には理解し難い」という感想が多く寄せられた。20代女性を主な対象としていることを説明すると、「私は対象の層ではないから見てはいけないのか」という声も上がった。事前の授業において、戦争や人権問題といった近い過去、または現在進

行形の事柄をテーマとして扱う際は、当事者が存命であることに留意して扱い方に気を付けるべきだと学んでいた。これは、博物館の展示がある特定の層に肩入れしたり、または排除したりするものであってはならないということだ。今回の実習展では、意図して特定の層を対象としたことで、間接的にその他の層を排除する形になってしまった。もちろん企画の段階で20代女性以外の人々を排除する考えは全くなかったが、授業での学びを活用し、気がつくべきだったと感じる。悪気がなかったとしても、私たちの設定により、ある人々に疎外感を与えてしまったことは反省すべきである。

2つ目は、来館者に理解があると思いつき、テーマに詳しくない来館者の理解が得られなかったことだ。対象者を自分たちと近い層に設定したことで、「私たちが知っていることは対象者 (= 来館者) も知っているだろう」との考えが潜在的にあったように思われる。このような考えから基礎的な説明を省いてしまったことで、事前知識のない来館者が展示を十分に理解することを妨げてしまった。

以上2つの問題は、どちらも対象者として設定した特定の層しか視野に入れず、対象以外の層の人々が来館する可能性を見落として

いたことが原因として考えられる。どのような展示であっても、その展示に特に興味を持つ層、持たない層がいることは当然だ。しかし、企画側が想定した以外の人々が来館する可能性も当然あることを忘れてはならない。どのような立場にある人も気持ち良く観覧出来るようにするためには、全ての人々が平等にアクセス出来る展示を作るべきである。

2. 情報（メッセージ）伝達の重要性について

本章では、資料を通して情報やメッセージを伝達することの重要性について論じる。

展示においては資料を紹介するだけでなく、資料を通して情報やメッセージを伝えることが大切である。むしろ伝えたいことがあることこそが博物館展示を博物館展示として成立させているとも言え、その点でデパートのディスプレイやショーウィンドウとは区別されるだろう。実習展での展示をこの観点から見直すと、3つの問題点が見えてくる。

1つ目は、展示の核となるテーマが全く見えないことだ。私たちは展示テーマとして「花（華）と装い」を設定したが、主なテーマが「花」と「装い」のどちらであるのかが不明確で、どっちつかずな印象になってしまった。現に、来館者や先生方が各グループの展示について表現する際、他のグループは「儉約令のグループ」、「結びのグループ」と表現されていたのに対し、私たちの展示は「花のグループ」、「装いのグループ」、「コスメのグループ」等、表現が統一されていなかった。このことから、私たちの展示テーマが明確でなかったことを感じることが出来る。また、集めた資料も、「装いに関する花柄の品」、「花柄の服飾品が描かれた品」、「服飾品と花が一緒に描かれた品」などばらつきがあり、一貫性の無さが目立った。メッセージを伝える以前に、核となるテーマが不明確で何を見せら

れたのか分からないといった印象になったことは反省すべきである。

2つ目は、資料を通して伝えたいメッセージを十分に検討しなかったことだ。博物館展示が資料を通して情報を伝えるものである以上、伝えたいメッセージを明確にしておくことは必要不可欠だ。しかし、「テーマを花と装いに設定する」ということ以上を話し合わず、「花と装いの何を伝えたいのか」を不明確にしたまま進めてしまった。上で述べた資料の一貫性の無さも、この点が原因と考えられる。メッセージが明確でないため、取り敢えず花と装いに関係する資料を集めようという考えになり、一貫性のない資料集めをしたことで、後からメッセージについて再検討することも難しくなってしまった。メッセージを伝えるという博物館展示の役割を軽視していたように感じられる。

3つ目は、展示ケースの見た目の印象にばかり囚われ、情報伝達のための配置が出来なかったことだ。博物館展示において重要なのは、ディスプレイとして美しいことではなく、情報がより伝わりやすいこと、つまり、資料と情報ありきの展示をすることだ。もちろん見た目も大切だが、それを気にするあまり伝わりやすさを放棄した展示にしてしまっただけは本末転倒である。特に、覗きケースの使用に関しては十分に反省する必要がある。本来ならば、「このような資料を展示したいから覗きケースを使おう」というように、資料ありきでケースを選ぶべきである。しかし私たちは覗きケースを使ってみたいあまり、「覗きケースを使うからこのような資料を展示しよう」と、ケースありきの企画をしてしまった。これでは「資料と情報ありきの展示」からは外れてしまう。加えて、和歌の色紙や造花の展示も検討の予知があったように思われる。色紙や造花で華やかな印象になり、来館者にイ

ンパクトを残したことは確かだが、メッセージや情報を伝えるという観点では必要性がなく、むしろデパートのディスプレイや文化祭の飾り付けを彷彿とさせてしまった。

以上の3点について共通して反省すべきは、「博物館展示は資料を通して情報やメッセージを伝えるものである」との意識が希薄であったことだ。見た目の印象や華やかさ、自分たちの興味関心にばかり目を向け、来館者に理解してもらうという肝心な視点が抜け落ちていたため、何を伝えたいのかが分からない、学びのない展示になってしまった。来館者に情報やメッセージを伝え、展示を見て勉強になったと感じて貰うためには、伝える側が博物館展示の意義を十分に理解することが必要だ。

3. テーマ設定とメッセージの観点から見た 実習展

これまで、テーマ設定とメッセージの観点から実習展を振り返ってきた。第1章と第2章での議論をまとめると、私たちの展示は、誰もが平等にアクセス出来る学びある展示からは掛け離れていたと言わざるを得ない。どのような社会的立場、バックグラウンドを持つ人にも不快感なく受け入れられる設定をすることや、自分の伝えたいことを明確にして有効に伝えることは、想像以上に重要かつ難しいことであると実感した。この点を実習展での最大の学びとして、今後留意しておきたい。

4. 博物館実習での成果と課題

本章では、博物館実習での成果と今後の課題について述べる。

1年間の実習を通して、学芸員という仕事に関して、また、他人とチームで働くということに関しての学びを得た。

実習を履修する前に学芸員という仕事に対して抱いていたのは、非常に専門的で、他の職業とは全く違った特別なことをしているというイメージだった。もちろん、専門性が高く、誰にでも出来る仕事ではないという印象は今でも変わらない。しかし実習を通して、学芸員の仕事において重要な能力は他の職業においても重要であり、そこに大きな隔たりはないことを知った。例えば、展示解説の能力はプレゼンの能力、展示制作の能力は企画立案の能力と言い変えることが出来る。履修前には、学芸員にならなければ実習で学んだことを活かす場がないとばかり考えていたが、この1年間で学んだことは決して学芸員として専門的なことだけでなく、どのような場面においても必要な能力だった。これは、実習で得た成果と言える。

一方で、チームワークに関しては課題が残った。これまで他の授業でのグループ課題やサークル活動等を通してチームで活動することを経験してきたが、実習展という厳しい評価が付けられ、かつ長期間の活動は、これまでの経験通りには進まなかったと感じる。従来のチーム活動では、多少メンバー同士の意思疎通や情報共有が滞ったとしても成果への影響は微小で、また成果に対する責任感も少なかった。そのため、作業が遅れたり議論が間違った方向に進んでいるように感じたとしても、責任感のなさや嫌われたくないという感情から指摘を控える傾向にあり、そのスタンスでも十分活動が成り立っていた。しかし実習展では、少しの妥協や他人に対する遠慮が原因で展示のクオリティが下がり、他のメンバーの評価にも影響することになってしまった。このことから、仕事として自分や他人、また成果物に対して責任を持たねばならない状況下では、これまでに経験してきたチームワークとは別の働きかけやスタンスが必要で

あることを学んだ。しかし今回この学びを得たからと言って、次回のチーム活動ですぐに全てを実践出来る訳ではないだろう。今後経験を積む中で改善すべき課題として、心に留めておきたい。

おわりに

この1年間の実習では、学芸員としての専門的な事柄に加え、どのような状況下でも必要とされる、一生の学びを得た。この学びを、今後の学問や仕事の糧としたい。

はじめに

私は実習展で〈両替商班〉において、図録の他に展示ケースの中のレイアウトを担当した。紙上で初期案から、借用できる展示品との兼ね合いや、使用するキャプションのデザインなどを考えたうえでレイアウトを作成した。

本稿では、展示のレイアウトを実際に作成して行く上で、感じた事や意識したことをまとめていくとともに、今回の実習展ではさらにどのようなレイアウト案が考えられたか反省とともに述べる。

1. 今回の実習展での展示レイアウト案

今回の実習展では、「大坂の両替商と大名—預申銀子之事—」というテーマで展示を行った。展示の軸としては、当時の両替商が使用した道具と、両替商に関する文書とで、二つの軸で計画が始まった。また、テーマを決めた段階での展示レイアウトの案は、使用できる展示ケースが二つであるので、道具・文書の一つずつのケースに分けて展示するというものであり、この方針は実習展まで継続し、実践した。

その他の初期案としては、

- 当時の使用状況や環境の再現
- 道具を一つずつ並べ、一つずつを見やすくする
- 展示品のシンボル化、象徴的に展示し世界観に引き込む
- 道具と文書の関係性が切れてしまう恐れがあることから、連続性の意識
- 導線の明確化を図るために、他班の展示の確認

- 解説キャプションの大きさに負けてしまわないように、展示品に目が行く工夫である。これらを最初の案の段階で出して意識し、展示品やテーマとそぐわなくなりそうであれば、変更するという姿勢で実習展に臨んだ。

両替商が使用した道具は最終的に、千両箱・貨幣・算盤・瓢箪秤・銭枮・看板を実際に実習展で展示することとなった（順番は展示順）。

まず、案として最初に考えられた「当時の使用状況や環境の再現」は、よく取り入れられる展示の方法であるとされ、博物館事務室の方から関西大学博物館でも行ったことがある展示方法であり、ありきたりになってしまうので望ましくないと助言をいただいたので、取り入れない方向に進んだ。また、この展示方法で進んでいた場合も参考にする当時の使用状況の文献や、根拠となる資料の収集に時間を取られ、文書の借用にも時間的な影響が出ることを考えられたために、最初の段階でこの案を無くすことができ良かったと感じた。

実際の展示では「道具を一つずつ並べ、一つずつを見やすくする」、「展示品のシンボル化、象徴的に展示し世界観に引き込む」ことを意識し、レイアウトに取り組んだ。「当時の使用状況や環境の再現」を早々に案としては無くしたので、道具を一つ一つ見せることが今回の展示テーマに一番適していると考えられた。

また、展示品のシンボル化は特に意識したいポイントであった。展示のテーマとして両替商を挙げていたが、観覧していただく方々

に、すぐ興味を持ってもらうのは難しいのではないかと懸念があったからである。そこで、展示の中に目を引くものを取り入れ、それを中心に組み立てていくという考えが私の中にあった。無事に両替商の看板を借用することができた。分銅のデザインに両替と刻まれたものであり、十分に目を引くことができるのではないかと思ひ、道具の展示はこれを展示の最初に持っていき興味を持ってもらえるようなレイアウトをする構想を立てた。

「道具と文書の関係性が切れてしまう恐れがあることから、連続性の意識」という案では、展示ケースごとに展示するものに大きな違いが出ることから、意識することが重要ではないかとの意見からでた案である。連続性については展示品の中でどう意識していくかが問題となる。むしろ展示ケースごとにしっかり分けた方が、違いがはっきりして見やすいのではないかという意見もあった。しかし、展示のテーマの中で括られてはいるものの関係性や連続性をないがしろにすると、テーマ自体がかすんでしまうとも私は考えたので連続性の意識は持つようにした。連続性の意識については、展示できるものが固まっていくと同時に考えていかななくてはならない課題となった。

導線については、後に他班との連携の部分で述べたいと思う。

「解説キャプションの大きさに負けてしまわないように、展示品に目が行く工夫」は、解説キャプションが展示品に比べ大きくなってしまふ事が予想されたので、意識していかなければならない点として挙げていた。先ほど述べた展示品のシンボル化との違いを持たせることも難しい点であった。実際に解説キャプションが出来上がり、ケースの中で確認してみると解説キャプションの大きさの関係もあり、まず目を引いてしまう事が確認された。

解説キャプションの文字を小さくすることは考えなかったために、展示の仕方に工夫が求められた。

2. 実際に行った展示のレイアウト

実際の展示では、道具と文書を別のケースに分けて展示することとなった。先に見せる道具の展示では、当時の使用状況や環境の再現ではなく並べて展示することとなった。しかし、解説キャプションまで入るスペースがなかったので、道具の隣に名前前のキャプションを作り、壁面に解説キャプションを貼る方法をとった。

また、導入部のキャプションを最初に持っていくこととなったので、最初に持っていこうと考えていた両替商の看板は、一つ目の展示ケースの最後に持っていくこととなった。シンボル化については、看板にライトを当てることで対応した。しかし、最初に持っていくことでシンボル化を狙っていたが、代案として出たライトを当てる方法はより両替商の看板を引き立たせることができたので、良い結果になったのではないかと考える。

連続性の意識という点では、しっかり達成できたかと言われるとあまり自信が持てないものとなってしまった。行った方法としては、道具の展示の最後に絵が描かれた紙資料を展示し、当時の使用状況と今回の展示に用いられている展示品の一部が実際に使われていたことを示すために展示した。しかし、これでは紙の資料を展示し、グラデーションを出そうとしても、あまり意味を見出せないものとなってしまい、連続性の意識を達成できないものとなってしまった。

展示品に目が行く工夫という点では、展示品を置く台の高さを調整することで来館者の目線と近くした。また、展示品自体の大きさも貨幣以外は小さいものではなかったので、

貨幣の部分はもう一段高くして対応したが、その他の展示品は班員との相談や、身長差で起こる見え方の違いにも配慮しながら展示品に目が行くように調整した。また、シンボル化との違いの出し方については、看板をライトで照らす方法をとったので自然と解消された。

3. 壁面の展示について

壁面の展示には、両替商の看板とパネルを展示した。基本的にはパネルを中心とした壁面の展示となった。パネルの種類としては、解説パネル、資料写真のパネルが用いられた。

両替商の看板については、先述のように上部からライトで照らし目立つように展示し、壁面で唯一の実物の展示品として、より目を引く展示方法をとれたと思う。上から吊るすという点も当時と同じように見せることができた。また、下からの支えがないと危険という指摘もいただいたので、下からの支えを下の台と同じ色で作成した。

パネルに関しては、担当してもらった班員が文字の大きさに気をつけながら作成してくれたので、壁面に展示しても見やすいパネル展示となった。展示ケースの最初に配置した導入のパネルでは両替商の説明をし、両替商の特徴について説明をした。その隣には、道具の隣に置くことが出来なかった道具の解説パネルを壁面に配置した。その隣に、両替商の看板を配置し、二つ目の展示ケースの壁面展示となった。

二つ目の展示ケースには、文書の展示を行った。借用できなかったが、写真での展示ができる資料があったのでパネルにして壁面に展示した。また、解説パネルも同時に配置した。最後には展示全体のまとめを壁面に展示し、終わりとした。

壁面のパネルは、レーザーを当てて全体の

高さで平行が取れるように調整をした。また、高さには台を置いた時と同様に身長差から起こる見え方の違いに留意しながら、多くの人が見えやすい高さに調整した。

4. 他班との連携や導線について

展示のレイアウトを決める際に、導線を意識してレイアウトの計画を立てた。この展示では文書資料を扱う事から、文書の向きに合わせて右から左への導線を設定した。この導線では展示室の入り口から順に観覧される方にも自然に最初の展示から見ていただけるものと想定して設定した。しかし、中には実習展の最後の班から観覧される方もおり、展示室の中で声をかけて、展示の最初へ誘導するという作業が必要となってしまった。これは、他班との連携不足が原因であると考えられる。

5. 反省

今回の実習展では私が思うところでも反省点が多くあった。まずは展示品を乗せる台である。台の色は、博物館にもともとあった灰色のものをお借りして使用していたのだが、私達の班の展示品に木製品が多くあったことから、あまり色が映えず暗いものとなっていると感じた。台の周りに白い布を巻くなどの対応をとれば良かったと反省する。

他にも、文書の展示では解説キャプションの分量が多くなってしまい、見えにくくなってしまった。壁面の展示でも言えることであるが、なるべく簡潔に見やすくする必要があるので、もう少し班員全員で意見を持ち寄り見やすくする工夫が必要であったと感じた。

シンボル化という点でも反省が残った。両替商の看板を展示の最初に持っていき、シンボル化しようという考えを持っていたが、最終的にはライトで照らして目立たせるという手法をとった。これ自体はしっかりと目立た

せることができたので良かったと思うが、両替商の看板以外にも導入パネルもライトで照らす手法をとった。当初は見やすく良いものではないかと考えていたが、自分たちが本当に見せたいものは何かを考えたときに、あまり適切ではなかったのではないかという反省が残った。展示ケース全体の照明をもう少し明るくし、解説パネルや展示品をもう少し見やすくすることで対応できたのではないかと考える。

他班との連携についても反省が残った。導線を設定する際に、展示室の入り口からの動きを意識した。入り口近くの班とは導線がかみ合ったが、私達の班の対面に位置する班とは導線がかみ合わないものとなってしまった。実習展という班に分かれての展示となっていたが、他班との話し合いや、実習展でなくても他の展示ケースとの兼ね合いなど意識する

ことが多くあるということが分かった。

また、先生からも多く指摘をいただいた。パネルの流れが切れているとの指摘もいただき、やはり展示の連続性の意識がもっと必要であり、それは展示の案を出す段階や借用する展示品を計画する時点でもっと練っておく必要があったと感じた。他にも、展示スペースに対してテーマが広いという指摘もいただいた。テーマ設定をする際に展示スペースの確認や、テーマに沿って借用を進めても途中で変更がきくテーマの設定が必要であると考える。

おわりに

今回の実習展では一年間、班員や博物館事務室の方、先生の皆様に多くの助けをいただいた。心からお礼を申し上げて、これからも学習を進めていきたいと思う。

はじめに

筆者ら博物館実習展民俗班は、実習展「儉約令：庶民のくらしを読み解く」において、関西大学総合図書館所蔵の近世文書「摂津国島下郡内瀬村西田家文書」を紐解き、そこから明らかになった村落の様相、人々の暮らしについて展示しようと試みた。

夜遊びをして大人を困らせる若者たち、奉公人に手をかけて妻にになってしまう男たちなど、江戸時代の人々のリアルな姿を紹介することができた。本展に対しては「現代とも通ずる人々の様子に驚いた」など肯定的な意見が寄せられた一方で、「内容がむずかしい」、「展示が地味」などといった批判的な意見も多く寄せられた。そこで本稿では、こうした批判を念頭に置き、実習展「儉約令：庶民のくらしを読み解く」の課題を検討するとともに、解決に向けた具体的方策を提案するものである。

なお、講評会の場において諸先生方から多数ご指摘があったように、本展は数多くの課題を残し、終了を迎えることとなった。本稿において検討すべき課題が山積であることは重々承知の上であるが、ここでは「展示の方向性」という課題に焦点を絞って議論を進めたい。すなわち、本展において筆者らは、展示者の側から情報を提供する姿勢に終始し、観覧者側から展示に関与する可能性を無視してはいなかったかということである。

1. 展示によって「叙述」するという視点

吉田伸之は、歴史博物館の展示について「歴史博物館内の専門職である学芸員＝歴史研究者が、いろいろな制約の下で、自己の研究をベースとして具現させるところの歴史叙

述の一つの様式」であると述べた¹⁾。

この見解によれば、博物館における展示は調査研究の成果を具現する場、すなわち論文や発表に類するものと捉えられる。筆者らの実習展「儉約令：庶民のくらしを読み解く」は、一貫して説明口調であって、史料を分析した結果を観覧者に紹介するという姿勢を貫いた。そうした点で、本展も「叙述」型の展示であったといえるだろう。

しかし、論文や発表原稿を書くようにして制作される展示が、学芸員の目指すべき展示の姿だと言えるのであろうか。ここで今一度、国の定める博物館の定義について確認したい。博物館法の第2条において、博物館とは「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」とされる。

展示に関して言えば、「一般公衆の利用に供」することが求められているが、叙述型の展示はこの要件に合うだろうか。というのも、研究者たる学芸員がその興味関心に従って制作した展示と、専門知識を持たない一般観覧者の求める展示とが合致するとは限らないからである。いかに専門性が高く、学術的に価値のある展示を制作したところで、観覧者に観てもらえなければ元も子もないだろう。

2. インタラクティブな展示を目指して

このように叙述型の展示は、観覧者からの関与を想定しない、一方通行の展示に陥る可

能性を孕んでいる。むしろ、研究発表の一機会という展示の側面を否定することはできない。しかし一般公衆の利用が前提とされる以上、展示者が一方的に投げかける展示ではなく、観覧者からも積極的に関与するインタラクティブな展示が目指されるべきである。いかにして観覧者からの関与を促すかを考える上で、湯浅隆による以下の見解が示唆に富んでいる。

博物館は、主たる機能を展示においた社会教育機関から、館ごとに設置・存在目的に沿って集められた資料・情報を利用者がそれぞれの関心から利用する場になるだろう。そのとき展示は、利用者が興味・関心を持ち、自ら調べてみようとするきっかけを提示するいわばショーウィンドーのような存在になっていくと予想できる²⁾。

湯浅のいう「ショーウィンドー」型の展示では、観覧者が展示をきっかけとしてアクションを起こしており、受動的な情報の享受に留まっていない。ここでいうきっかけには、例えば、観覧者が自由に考察したり推論したりする余地を展示に与えるなどといった、展示者の側からの働きかけが想定される。

3. インタラクティブな古文書展示という視点

それでは、実習展「儉約令：庶民のくらしを読み解く」をインタラクティブな展示へと再編するため、どのような視点を取り入れるべきであろうか。筆者は、古文書展示の再解釈にこそインタラクティブな展示の可能性が秘められているのではないかと考える。

白井哲哉は古文書の展示について「それを読み、解釈するという作業が不可欠であり、したがって展示方法も専ら視覚に頼る手法を取らざるを得ない。しかも解釈という作業は従来観覧者の側に要求されてきたものであり、その難解さが『文書資料は展示に向かない』

との認識を作ってきた」と述べる³⁾。

しかし白井は「『文書資料は展示に向かない』という認識」について、「文書資料の属性」に起因するものではなく「旧来の美術品的な展示を踏襲するのみで独自の方法を考えてこなかった博物館の側に責任がある」とも指摘する⁴⁾。裏を返せば古文書それ自身は、「読む」、「解釈する」といった展示への関与を観覧者へ働きかける、インタラクティブな可能性を秘めた資料だと捉えられる。

長村祥知は、各地で古文書展示がしばしば開催されること、2013年度には大規模古文書展示が多数開催されたことなどを踏まえ、「集客・収益に結び付かないと思われている文献資料の展示であるが、本質的な理解への要望は確実に存する」と断言する⁵⁾。観覧者に委ねられる「読む」、「解釈する」といった作業を、他の方法でどれだけフォローできるか、それによって古文書の展示はつまらない展示にも、魅力的な展示にもなりうるのである。

4. 「儉約令：庶民のくらしを読み解く」を再考する

それでは、古文書の解釈を補助する展示の工夫としては、どのようなものが考えられるだろうか。ここでは、興味深い二つの事例について紹介し、「儉約令：庶民のくらしを読み解く」に取り入れる場合についても考えてみたい。

例えば、千葉県立中央博物館大利根分館の企画展示『水郷の生活と船』では、四コマ漫画を用いた古文書の解説が試みられている。古文書横にキャプション、現代語訳、読み下し文が配置されるとともに、古文書の内容を要約した四コマ漫画が作成され、壁面に掲示された。当該企画展を担当した米谷博によれば、「漫画には時代背景と資料の主題を盛り込

むようにし、現代との違いにも気が付いてもらえるようなまとめ方を目指した」という⁶⁾。

四コマ漫画は、手紙などストーリーの組み立てやすい古文書に有効な手法であって、「儉約令：庶民のくらしを読み解く」で扱った村明細帳、村絵図、儉約令のような古文書では難しい。しかし、漫画調のイラストを取り入れたパネルなどは、古文書に記述された世界観を表現できるという上で有効だろう。ただし、登場人物の服装や容貌など古文書に記されない要素を創作することとなり、史実との混乱を避けるため、注意書きをするなど配慮が必要である。

また滋賀県立琵琶湖博物館では、古文書に平易なタイトルをつけることで、古文書をわかりやすく展示している。例えば、江戸後期の手紙「千之助母書状」には「お母ちゃんの気持ち」とタイトルがつけられた。柔らかな表現に言い換えることで古文書に記された母心が見事に表現されている。明治初期の手紙「居初漱翁書状」には「私、怒ってます！」とタイトルをつける。縁談を断られた仲人である書き手の感情にフォーカスしたタイトルが、端的に古文書の内容を示している⁷⁾。

このように堅苦しい資料名とは別に、やさしい言葉を使ったタイトルをつける取り組みは、「儉約令：庶民のくらしを読み解く」のように、人々の生活や様子など身近な題材を扱う場合に、親近感や共感を高める方法として有効だと考える。

5. 結びにかえて：古文書による地域誌展示の可能性

ここまで本展の課題を中心に論じてきたが、もちろん本展には肯定的に評価される点もある。なかでも筆者は、関西大学総合図書館の所蔵する近世文書を活用し、その資料の利用価値を再確認した点を評価したい。

長村祥知は、文書史料について「絵画・彫刻や工芸品に比して見映えがせず、歴史系の展示の中でも考古遺物や民俗資料に比して特に地味」であり、「それゆえに、集客や収益を厳しく問われる場合には、早くも企画段階で敬遠されたり出品数を減らしたりする傾向も強い」と指摘する⁸⁾。白井哲哉も「一般に文書閲覧機能を持たない博物館においては、これらの資料は死蔵に近くなってしまおう」と述べる⁹⁾。

もちろん関西大学総合図書館は文書閲覧機能を持っており、死蔵とまでは言えないが、本学の図書館が、かように豊富な近世文書コレクションを所蔵していることを知る学生は少数であろう。日の目を浴びることの少ない文書資料の活用方法を考える上で本展の取り組みは評価されるだろう。

また、西田家文書のような地域の古文書を一般の人々には馴染みの薄い制度史などの視点ではなく、生活史や民衆史の視点で利用することは、その史料的価値を周知する意味でも大きな役割を果たすのではないだろうか。

八木滋は「地域史の叙述を地域に暮らす人々やそれに関心のある市民に届けようとするならば（中略）地域の結節点として位置づけられた地域博物館で、その地域によって育まれた資料にもとづいて展示することが、一番適切な方法なのではないだろうか」と指摘し、「地域博物館では、展示者と観覧者との目的が一致する可能性が高い」との見解を示している¹⁰⁾。地域に眠る資料の価値を再定義する試みとして、本展のような古文書による地域誌展示の果たす役割は大きいだろう。

註

- 1) 吉田伸之「江戸東京博物館で考える：展示叙述について」（『歴史評論』526、歴史科学

- 協議会、1994) 58頁。
- 2) 湯浅隆「歴史学の動向と歴史博物館の展示」(『教職・学芸員課程研究』1、東京女子大学、2018) 82頁。
 - 3) 4) 白井哲哉「古文書史料をいかに展示するか—文書資料の展示技術小考」(『MUSEOLOGIST: 明治大学学芸員養成課程年報』5、明治大学学芸員養成課程、1990年) 27頁。
 - 5) 長村祥知「博物館における古文書・古記録の展示と教育」(『人間教育学研究』3巻、奈良学園大学人間教育学部、2015年) 23頁。
 - 6) 米谷博「古文書をやさしく展示する: 歴史資料の展示方法をめぐって」(『MUSEUM ちば』38、千葉県博物館協会、2007年) 13~14頁。
 - 7) 滋賀県立琵琶湖博物館「古文書をわかりやすく展示しています: 江戸時代、江戸時代後期、明治時代初期の古文書」『PR TIMES』2017年、2022年1月13日閲覧 (<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000011.000026983.html>)。

- 8) 長村前掲稿、16頁。
- 9) 白井前掲稿、30頁。
- 10) 八木滋「『歴史展示』に関するノート—『展示叙述』論の視点から—」(『大阪歴史博物館研究紀要』15、2017年) 104頁。

参考文献

- 笹原亮二「『民俗世界と博物館: 展示・学習・研究のために』を巡って」(『国立民族学博物館調査報告』16、192~209頁、2000年)。
- 塚本学『歴史・民俗・博物館』高志書院、2022年。
- 日本民俗学会『民俗世界と博物館: 展示・学習・研究のために』雄山閣、1998年。
- 橋本裕之「物質文化の劇場: 博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション」(『民族学研究』62-4、537~562頁、日本文化人類学会、1998)。

2022年度〈博物館実習〉を振り返って

22M2037 西野 愛

はじめに

博物館実習がついに終わった。実習、東京研修、実習展の開催、忙しかった日々が早くも懐かしい。

筆者は学部時代から学芸員を目指していた。大学院に進学したのも、研究職でもある学芸員に就くにはより専門的知識が求められる、と学部時代の学芸員課程の教員から進学を勧められたためである。そして、学芸員課程最後の科目博物館実習を受講したことで、学芸員職への憧れ、職務に対する心構えが、より高まったと思っている。

これより、本稿は、2022年度の博物館実習を振り返ると同時に、筆者が得た学び、反省点について、各章ごとに述べていく。

なお、途中で写真を掲載するが、全て筆者の撮影によるものである。

1. 授業

筆者は立命館大学（学部）、関西大学（大学院）の両校で学芸員課程を受講したが、本学の学芸員課程の最大のメリットは、大学構内に博物館を“使って”授業を行える点にある。通常の授業中も何度も関西大学博物館を利用し、館内で実習も行うことができた（土器類の移動・展示ケース内への搬入など）。より実践的な学芸員の育成には、打ってつけの環境が整っていたといえるだろう。

本講義では、多岐にわたる資料の取り扱いを学んだ。が、中でも特に印象に残っているのは、〈刀剣の取り扱いの基礎と方法（2022年6月25日）〉の講義である。

この回では、刀匠の河内國平先生（並びに河内先生のご子息の河内晋平先生、高見國一

先生）より、刀剣の作られ方、そして手入れの方法を教わった。これまでフィクションの中でしか見たことがなく、また刃物も精々包丁しか使った事のない筆者は、初めて日本刀を握った時は怖くて堪らず、手入れの作業も大変まごついていた。

なお、筆者を含め、並んで作業をしていた他の学生達は、最初のうちは全員顔が強張っており、その様子を先生方は微笑ましそうに見ていた。それでも、二度三度と手入れの練習をこなせば、恐怖もそこまで感じなくなった。一步間違えれば死亡事故もあり得る器物を取り扱う授業など、生まれて初めてで、この時の体験は、博物館実習の凄烈な思い出として心に刻まれたであろう。

2. 博物館見学

博物館見学に際しては、筆者は以下の点に注目して観察した。それは「パネル・題箋の見やすさ」、「博物館の“ウリ”となる点」、「来館者にストレスを感じさせる点はないかどうか」の3つである。

特に、筆者はかねてより実習展ではパネル・題箋のデザインを作りたいと考えていたこともあって（実際に担当した）、「パネル・題箋の見やすさ」について特に気を配った。見学によって得た成果については、次の博物館実習展の章で述べるため、ここでは省く。

さて、博物館見学の中でも、筆者は大阪府立弥生文化博物館で実施した動向調査が特に有意義であったと感じている。例として、筆者が観察した対象と、その動向を以下に纏めた。

〈対象〉

20～40代の男女（夫婦、あるいはカップルか）

〈動向〉

- 博物館が好きなのか、弥生時代に関心が深いのか、二人で話し合いながら展示を観覧していた。
- モニター系の解説を特に見ており、長時間立ち止まりやすい。
- 男性のほうが弥生時代（あるいは歴史）に対する知識がある模様。
- 模型にも注目していた。

できれば、対象が見ていた展示の詳細についても調査したいところであるが、流石にプライバシー侵害に抵触しかねないので断念するほかない。が、こういった調査だけでも、“来場者が好むもの”、“来場者の動き方”、“どんな展示が好まれるか”、といった事が学べる貴重な体験となった。

そして、これは博物館見学の授業に対する批評、あるいは今後の要望でもあるが、筆者は博物館見学というものは、きちんと「目的」を設定しておく必要があると日々考えている。

見学というのは、ともすれば“ただ見て帰るだけ”に終始してしまう危険性を孕んでいる。それでは折角学芸員課程の中でわざわざ「見学」という授業を設けた意義が失われてしまう。

だからこそ、「学芸員課程の博物館見学」の授業では、大阪府立弥生文化博物館で行った動向調査のような、“確固たる成果が得られる”課題、あるいはカリキュラムを、毎回の博物館見学で積極的に設定してもらいたい。

• 東京都下宿泊研修

筆者の班（後の『結びの文化』班）が東京研修で訪れた博物館は以下の通りである（全員で入館した博物館・美術館も含む）。

8月3日 東京国立博物館

8月4日 国立西洋美術館、日本書道美術館、明治大学博物館、印刷博物館

8月5日 郵政博物館、国立科学博物館

当初、班内では「実習展では郵便に関する展示がしたい」という意見があり、その結果、これらのラインナップとなった。初日が東京国立博物館のみなのは、東京都出身の班員の勧めによるもので、結果として良い経験となったので感謝している。

では、この研修を通じて筆者が痛感したのは、首都の“国立”博物館と地方のそれとの格差である。まず、博物館の規模が全く違う。これは先の東京都出身の班員の言であるが、「東京国立博物館と国立科学博物館は一日使わないと全部見るができない」。

正にその通りであった。初日の東京国立博物館は閉館時間ギリギリまでいてやっと全て見る事ができた（最後の方は移動しながらで、まともに鑑賞できていない）。最終日の国立科学博物館もほとんど同じ結果となった。

筆者が訪れたことのある国立博物館といえば、奈良国立博物館・京都国立博物館（いずれも博物館見学で見学しにいった）だが、その規模は比べるべくもない。が、果たしてコレクションの数や、首都圏の立地だけがこの格差を作っているのだろうか？ 筆者は「最新鋭の展示スタイル」に注目した。

これは東京国立博物館、体験展示スペースにある〈日本美術のデジタル年表〉である。

写真は日本美術史のPVだが、このスクリーンは特定の位置（わくわくポイント）に立ち、手を振るといった動作をすることで、博物館所蔵の經典をスクリーン上で映し出したり、銅鐸の拡大画像を見る、といったアトラクション型の展示が楽しめる。

首都圏の国立博物館と地方の国立博物館の

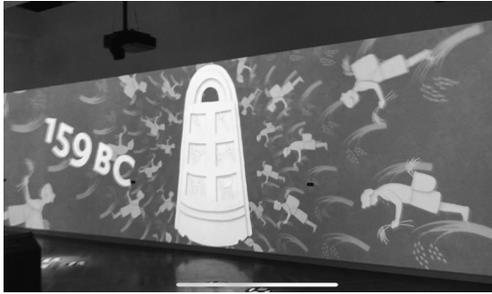


図1 東京国立博物館映像展示状況

明暗を分けるのは、このような展示方法の“アップデート”を積極的に行っているかどうかではないだろうか。より時代に合わせ、学ぶ“楽しさ”、“新しい発見”を来館者に提供する姿勢が、今後の博物館には肝要であろう。

3. 博物館実習展

東京研修を経て、会議を重ねた結果、筆者の班は「日本における“結び”の文化」をテーマに掲げ、実習展に取り組むこととなった（以降班名は『結びの文化班』と統一する）。

会議の経過としては、当初掲げていた「郵便」は、東京研修での郵政博物館の見学の結果、展示物の収集が困難ということで断念。その後、「和風」をテーマにしたいという意見が上がり、そこから「正月の水引飾り」とい

った“結び”の文化が選ばれた。

・準備期間

その後、班内で「ポスター担当」「図録担当」「広報担当」といった様に、仕事が割り振られた。筆者はかねてより希望していた「パネル・題箋担当班」となった（パネル・題箋は大量に作るため、担当は複数人と決められた）。

当初、デザインを筆者が受け持ち、『結びの文化展』全体のコンセプトを統一するため、先に完成していたポスターと色合いを合わせることにし、デザインした。

デザインはできる度にLINEの班全体グループで共有し、班員の意見をもとに、試行錯誤を繰り返した。

パネルの解説は「パネル・題箋担当班」で手分けして執筆したが、他の班員は部活動や文化祭の準備による多忙から、実習展の作業に携わるのが困難になり、後半から筆者がパネル解説の文章編集・題箋作成も引き受けた。

パネルの文章を書くにあたって、字数・文字列の設定にあたっては、準備期間中に開催していた奈良国立博物館・第74回正倉院展のパネルも大いに参照している。

同様の事態は『結びの文化班』全体でも発生したが、各担当を越えて班全体で協力し、



図2 ポスター

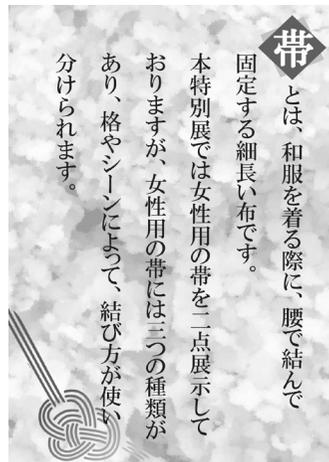


図3 パネル初期案

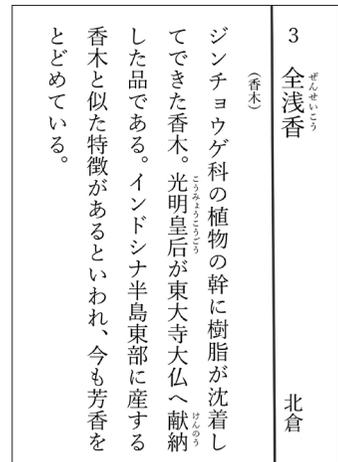


図4 正倉院パネル模写

実習展当日までに展示を完成させることができた。



図5 展示準備状況

・実習展開催中

一言でいえば、賛否両論だったと言える。特に顕著だったのは『結びの文化展』のトリを飾る〈帯・福良雀〉で、中々厳しい意見も多く、ほとんど見ずに次の展示へ目を移す来場者もいた。先生方からも同様の意見がでたが、二日目には評価してくれた来場者もいた。

筆者としても、“帯結びを用いたインテリア”というアイデアは大いに気に入っているので、改善の余地はあると考えている（モダンな柄の帯を使う・椅子のデザイン性）。

その一方で、〈羽子板飾り〉の方は総じて高く評価されており、展示室の中央付近に設置していた事から特に注目度が高かった。



図6 帯・福良雀



図7 羽子板飾り

インタープリテーション、解説に関しては、来場者と適度に距離を保ち、かつ声を掛けやすいよう来場者の視界に入るぐらいの間合いを取っていた。それゆえ、来場者から質問も何度かお願いされた。解説としては、インタープリテーションの授業を踏まえつつ、丁寧に解説したつもりだったが、もっと重要なポイントにのみ絞って解説すべきだったと反省している。

そしてパネル・題箋については、文字の見やすさ、パネルのデザインに関しては概ね高評価をもらえたが、解説の内容が浅い、そして題箋が大きすぎる、といった点を指摘された。

また、パネルも解説が不十分だった点を鑑みて追加のパネルを作成した。

しかし、実習展開催中に目立ったトラブルもなく、実習展を終えることができたのは幸いである。

・講評を受けて 実習展の反省

インタープリテーション、パネル解説文の不十分さなど、問題点は多く見受けられたが、筆者としては「大きく読みやすい」、「読みやすさを損なわないデザイン性」に重点を置いてパネル・題箋を作成したので、その目標が達成した事に対しては大いに満足している。

しかし、実習展準備中に関しては反省点は多い。各担当に分かれて仕事をするのは妥当であるが、その分各担当で孤立化してしまった点が、今回の実習展のクオリティを下げた要因だと考えている。

先生方からも指摘された点ではあるが、展覧会は“チーム全体で”作るもの、という意識を持ち、担当外の仕事の進捗状況にも気を配らなければならないと思った。

4. 受講の成果

前項でも述べた通り、実習展での失敗を通

して、チームプレイの在り方について学べたと考えている。また、結果的とはいえ「パネル・題箋班」のリーダーのポジションとなったことで、作業できない各メンバーのフォローや状況確認といった、こなしたことの無い仕事を請け負ったのは、今までの人生を通して大きな経験だったと言える。

5. 今後の課題

今後の課題としては、インタープリテーションのスキルを磨く事が挙げられる。実習展で、上手く解説できなかったことは悔しいと感じているが、同時に学芸員の職務を遂行する上で欠かせないスキルとも考えている。他の博物館と所蔵品のやり取りをする際も、展覧会を開催するにあたってチーム内で会議をするときも、“自分の考えを伝える”事は必須だからだ。

現在、塾講師のアルバイトをしているが、その業務を通じて、この課題を心において、“自分の考えをより伝わるように”話し、コミュニケーションをとる訓練をしたい。

おわりに

最後に、本学で博物館実習の講義を受けられて、本当に良かったと感じている。

講義を受けている間は成功も失敗も繰り返した。しかし、どの経験も今後学芸員として、社会人として生きていく上で重要な事を沢山学ぶことができたからである。

【謝辞】

この場を借りて、博物館実習の講義で指導していただいた先生方、博物館事務室の職員の方々、そして博物館実習展の開催にあたり、ご支援・展示物の提供をして下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

この一年間、誠にありがとうございました。